

聖書日課 『からし種』 2019.5.26-6.2

<p>26日 (日)</p> <p>創世記 39章</p>	<p>「しかし、主がヨセフと共におられ、恵みを施し、監守長の目にかなうように導かれた」(21節)。侍従長ポティファルの家で仕えるヨセフだったが、侍従長の妻の理不尽極まりない、偽りの訴えによって監獄に入れられてしまう。聖書は「しかし、主が…」と、ヨセフの苦難を共に歩む主を語る。今日、「しかし、主が…」と、主なる神を主語にして語る信仰を与えたまえ。</p>
<p>27日 (月)</p> <p>創世記 40章</p>	<p>「ヨセフは『解き明かしは神がなさることではありませんか。どうかわたしに話してみてください』と言った」(8節)。かつて父親の寵愛を受けて得意気に夢を解き明かし、兄たちの反感を買ったヨセフ。しかしエジプトでの不遇を通して、神の導きと助けなしには何もできない自分を学ぶ。同時にヨセフは神が導かれる働きならば必ず祝されることも学んだのだった。</p>
<p>28日 (火)</p> <p>創世記 41章</p>	<p>「ヨセフはファラオに答えた。『わたしではありません。神がファラオの幸いについて告げられるのです』」(16節)。昨日の場面につき、ここでもヨセフは神中心の信仰にゆるぎなく立てられ、自分を誇るところが無い。なかなか努力が報われず、むしろ不遇を重ねたヨセフだったが、神は彼の信仰を守ってくださり、神の器に必要な鍛錬を積みかせてくださったのだった。</p>
<p>29日 (水)</p> <p>創世記 42章</p>	<p>「ヨセフは彼らから遠ざかって泣いた」(24節)。あの日から二十数年、まさかこのような形で兄たちに再会しようとは。ヨセフは自分の中の兄たちへの厳しい思いをどう処すべきか迷う。しかし兄たちの心に、かつて犯した罪を悔いる思いが息づいていることを知った時、ヨセフは涙を抑えられなくなる。神につながる小さな思いが、和解に向かう一歩を押し出していく。</p>

聖書日課 『からし種』 2019.5.26-6.2

<p>30日 (木)</p> <p>創世記 43章</p>	<p>「ヨセフは急いで席を外した。弟懐かしさに、胸が熱くなり、涙がこぼれそうになったからである」(30節)。同母兄弟のベニヤミンはヨセフにとって特別な存在だった。弟の出産時に亡くなった母への思いも重なっていたのかもしれない。ヤコブの十二人の息子たちの間に行き交っていたであろう複雑な感情を想う。そのような人間が抱える愛憎を通して、神は働きたもう</p>
<p>31日 (金)</p> <p>創世記 44章</p>	<p>「御主君に何と申し開きできましょう。今更どう言えば、わたしどもの身の証しを立てることができましょう。神が僕どもの罪を暴かれたのです」(16節)。とうとう兄たちの罪責告白がヨセフの前に発せられる。ヨセフの「意地悪」ともいえる一連の言動は、兄たちのこの言葉をどこかで求めていたのだろうか。神を畏れる罪責告白が、人と人との間の和解を導いていく。</p>
<p>6月1日 (土)</p> <p>創世記 45章</p>	<p>「わたしはあなたたちがエジプトに売った弟のヨセフです…命を救うために、神がわたしをあなたたちよりも先にお遣わしになったのです」(4-5節)。ひれ伏し嘆願する兄ユダの言葉に、ついにヨセフは自分の身を明かし、声をあげて泣いた。人間の憎悪をも用いて、すべてを導かれた神の遠大な計画。「神を主語として語る信仰」を私もいただくことができるように</p>
<p>2日 (日)</p> <p>創世記 46章</p>	<p>「エジプトへ下ることを恐れてはならない。…わたしがあなたと共にエジプトへ下り、わたしがあなたを必ず連れ戻す」(3-4節)。寄留の民ヤコブは、見つかったヨセフのいるエジプトへ家族で下ることに不安を持っていた。しかし神は、その旅路、エジプトでの生活にも伴って下さる約束をしてくださる。不安の中にも主の伴いがあることを信じて歩みたい。</p>